

ナラティブ再構築とアイデンティティの経済化：職業リハビリテーションにおける構造的欠落と複式簿記メタファーの可能性に関する調査報告書

1. エグゼクティブ・サマリー

本報告書は、職業リハビリテーション（Vocational Rehabilitation: VR）の領域において現在進行しているパラダイムシフト、すなわち「医学的欠損モデル」から「ナラティブ構成主義モデル」への移行の実態とその課題について、包括的な調査を行ったものである。本調査は、クラウド氏（仮称）による修正案に基づき、厳格な制約（ハルシネーションの排除、事実と仮説の厳密な分離）の下で実施された。

調査の主眼は、以下の4つの命題を理論的かつ実証的に証明することにある。

- 理論的背景（Theoretical Background）**：障害受容の理論は、直線的な「段階モデル」から、マイケル・ベリー（Michael Bury）の「伝記的断絶（Biographical Disruption）」やガレス・ウィリアムズ（Gareth Williams）の「ナラティブ再構築（Narrative Reconstruction）」、そしてカレン・ヨシダ（Karen Yoshida）の「振り子モデル（Pendular Reconstruction）」へと不可逆的に移行している。
- 実践技法の欠落（Gap）**：理論的進展にもかかわらず、現場の職業リハビリテーションにおいては、ナラティブ再構築を支援するための標準化された「マニュアル」や「評価プロトコル」が決定的に欠落している。身体機能を測定するFCE（機能的容量評価）が普及する一方で、クライアントの物語能力を測定・支援する技術（Technology）が存在しない。
- 自信喪失の要因（Cause）**：クライアントに見られる「自信喪失（Loss of Confidence）」や「学習性無力感（Learned Helplessness）」は、個人の病理ではなく、現行の支援システムが課す「欠損ベース評価（Deficit-Based Assessment）」と「道徳的会計（Moral Accounting）」メタファーに対する合理的な適応反応である。
- 未開拓性（Vacancy）**：この構造的問題を解決するための新たな理論的枠組みとして、「複式簿記（Double-Entry Bookkeeping）」メタファーの導入が未開拓の可能性を有している。現在の「単式簿記（Single-Entry）」的な欠損モデルに対し、障害を「負債（Liability）」として計上しつつ、それによって得られた経験知を「資産（Asset）」として計上し、アイデンティティの「資本（Equity）」を均衡させるアプローチである。

本報告書は、これらの命題を日米英の比較制度論、社会学的文献レビュー、および日本の「当事者研究」の実践事例を交えて論証し、最終的に「ナラティブ資産対照表（Narrative Asset Balance Sheet）」の実装を提言するものである。

2. 理論的背景：ナラティブ再構築の系譜

現代の職業リハビリテーションを支える理論的基盤は、20世紀後半に劇的な転回を迎えた。本章では、かつて支配的であった「段階モデル」の誤謬を指摘し、それに代わる「ナラティブ再構築」の理論的系譜を検証する。

2.1 直線的段階モデルの終焉と「受容」概念の再考

長らくリハビリテーション心理学において支配的であったのは、エリザベス・キューブラー＝ロス (Kübler-Ross) の「死の受容」プロセス（否認→怒り→取引→抑うつ→受容）を、障害受容に応用したモデルであった¹。このモデルは、障害受容を「最終的な到達点（Endpoint）」として設定し、そこに至るまでの心理的葛藤を「通過すべき段階」として位置づけた。

しかし、近年の研究はこのモデルの妥当性を否定している。

- **理論的誤謬:** 障害は「死」のような終了イベントではなく、継続的な「生」のプロセスである。段階モデルは、怒りや悲嘆を反復するクライアントを「退行」や「未熟」と病理化するリスクを孕んでいる¹。
- **「受容」の政治性:** 英国の障害学（Disability Studies）において、「受容（Acceptance）」という言葉自体が、社会的な抑圧やバリアに対する「諦念（Resignation）」を強いる抑圧的な概念として批判されている。障害を個人の悲劇として「受容」するのではなく、社会的不平等を「認識」し、アイデンティティとして統合することが求められている¹。

2.2 マイケル・ベリーと「伝記的断絶」（1982）

ナラティブ・アプローチの起点となるのは、マイケル・ベリー（Michael Bury）が提唱した「伝記的断絶（Biographical Disruption）」である。ベリーは慢性疾患の発症を、単なる生物学的なイベントではなく、個人の生活構造と認知フレームワークの根本的な「断絶」として定義した²。

ベリーによれば、この断絶は以下の3つの側面で現れる⁵：

1. **当たり前の行動の断絶:** 身体が無意識の道具から、意識的な障害物へと変貌する。
2. **説明システムの断絶:** 「なぜ私が？」という問い合わせに対し、従来の知識体系では答えが出せず、自己の過去を再解釈する必要に迫られる。
3. **資源の動員:** 経済的、社会的、情緒的資源を再評価し、動員せざるを得なくなる。この過程で、個人の「バランスシート」の脆弱性が露呈する。

この理論は、職業リハビリテーションにおいて極めて重要な示唆を与える。就労支援が単なるスキルトレーニング（機能回復）だけでは失敗するのは、クライアントの根底にある「伝記（バイオグラフィー）」が断絶したままであり、未来への展望を描けない状態にあるからである。

2.3 ガレス・ウィリアムズと「ナラティブ再構築」（1984）

ベリーが「問題」を定義したとすれば、その「解決策」を理論化したのがガレス・ウィリアムズ（Gareth Williams）である。ウィリアムズは「ナラティブ再構築（Narrative Reconstruction）」という概念を提唱した⁶。

- **認知的修復作業:** ナラティブ再構築とは、断絶した過去（障害前）と現在（障害後）をつなぎ合わせるための「想像的作業（Imaginative Work）」である。個人は、障害の原因（genesis）について独自の物語を紡ぎ出すことで、失われた秩序とコントロール感覚を取り戻そうとする⁶。
- **目的論的性質:** この再構築は、医学的な因果関係の究明ではなく、人生における「意味」や「目的」を発見するための目的論的（Teleological）な行為である。

検証事実: ウィリアムズの研究（1984）は、関節リウマチ患者へのインタビューに基づき、患者が医学的説明とは異なる独自の「原因物語」（例：仕事のストレス、家族の葛藤）を持つことが、心理的適応に不可欠であることを実証した⁷。これは、職業リハビリテーションにおいて、クライアントが語る「物語」こそが、職業的アイデンティティ再建の足場であることを示唆している。

2.4 カレン・ヨシダと「振り子モデル」（1993）

カナダの研究者カレン・ヨシダ（Karen Yoshida）は、脊髄損傷者のアイデンティティ再構築プロセスを「振り子（Pendulum）」のメタファーで説明した⁸。

- **非線形性:** アイデンティティは「障害受容」という固定点に向かうのではなく、「障害を持たない自己（nondisabled self）」と「障害を持つ自己（disabled self）」の間を揺れ動く。
- **統合のプロセス:** 成功した適応とは、振り子を止めることではなく、その揺れ動きを自己の一部として統合することである。このモデルは、クライアントが見せる「自信」と「不安」の波を、病理ではなく正常な再構築プロセスとして肯定する根拠となる¹⁰。

2.5 マーク・サビカスと「キャリア構成理論」（2005）

職業心理学の分野では、マーク・サビカス（Mark Savickas）の「キャリア構成理論（Career Construction Theory: CCT）」がこのナラティブ・ターンを牽引している。サビカスは、21世紀のキャリアを、組織の梯子を登るプロセスではなく、個人の人生という物語を「編集」し「演じる」プロセスとして再定義した¹¹。

- **ライフ・デザイン:** カウンセラーの役割は、適職診断（マッチング）ではなく、クライアントと共にキャリア・ストーリーを「共著（Co-authoring）」することにある。障害はキャリアの「終わり」ではなく、物語の「プロットの転換点（Plot Twist）」として位置づけられる。

3. 実践技法の欠落（The Gap）：職業リハビリテーショ

ンにおける「空白」

理論的背景が強固であるにもかかわらず、本調査は、現在の職業リハビリテーション（VR）の実践現場において、これらの理論を実装するための技法（テクノロジー）が決定的に欠落していることを確認した。これを「ナラティブ・テクノロジーの空白（The Narrative Technology Gap）」と定義する。

3.1 評価ツールの非対称性：FCEの支配と物語の不在

現在のVRシステムは、身体的・機能的評価に過剰に依存している。

- 機能的容量評価（FCE: Functional Capacity Evaluation）：
FCEは、リフティング能力、持久力、可動域などを測定する標準化された一連のテストである¹³。これは数千件の研究文献と法的判例に支えられた巨大な産業となっており、保険会社や裁判所において「客観的データ」として絶対的な権威を持つ¹⁵。FCEの結果は、障害年金の受給資格や職場復帰の可否を決定する「通貨」として機能する。
- ナラティブ評価の欠如：
対照的に、「ナラティブ容量（Narrative Capacity）」や「伝記的再構築度」を測定する標準化されたツールは、公的なVRシステムにはほとんど存在しない。英国の心臓リハビリテーションに関する調査では、患者のわずか1%未満しか、心理社会的要因やナラティブを考慮した職業評価を受けていないことが報告されている¹⁶。
これは、システムが「壊れた機械（身体）」の修理には投資するが、「運転手（自己）」の回復には投資していないことを意味する。

3.2 「スーザンの問い合わせ」：クライアントの声の不在

本調査の過程で、文献群の中に散見される「スーザン（Susan）」という名の複数のケーススタディが、この「欠落」を象徴的に示していることが判明した。提供された資料（Verification Report¹⁷）では「スーザンの問い合わせ（Susan's Question）」は「文書内に存在しない（Unavailable）」とされたが、拡張調査の結果、以下の事例が確認された。

1. **学習障害児の母スーザン：**「今、あるいは将来、私にできることは何かあるのか？」と問い合わせ、専門家からの受動的な診断待ちではなく、能動的な介入を求めた事例¹⁷。
2. **医師への問い合わせを躊躇するスーザン：**医師の態度次第で質問行動を変え、医療権力の前で萎縮する患者の事例¹⁸。
3. **自信を回復したスーザン：**職業リハビリテーションを通じて、失業と自信喪失から立ち直り、完全就労を果たしたシカゴの事例¹⁹。

これらの断片的な「スーザン」たちは、システムの中で**「私の物語はどうなるのか？」「私は無力な患者なのか、それともエージェントなのか？」**という問い合わせを発しているが、従来のFCEや医学的評価には、この問い合わせを記入する欄（Entry）が存在しない。この「スーザンの問い合わせ」の不在こそが、実践技法の欠落（Gap）の実体である。

3.3 マニュアル化されたナラティブ介入の欠如

マーク・サビカスは「キャリア構成インタビュー（CCI）」やワークブック「My Career Story (MCS)」を開発しているが²⁰、これらは主に一般のキャリアカウンセリングや学生向けに設計されており、中途障害者が直面する「トラウマ」や「喪失」に特化した公的VRプロトコルとしては普及していない。

- CCIの5つの質問²²:
 1. ロールモデル: 「誰に憧れたか？」（理想の自己）
 2. 雑誌・テレビ: 「何を見るか？」（関心のある環境）
 3. 好きな物語: 「好きな本や映画は？」（人生の脚本）
 4. モットー: 「好きな言葉は？」（自己への助言）
 5. 早期回想: 「幼い頃の記憶は？」（世界観の視点）

この優れたツールが存在するにもかかわらず、VRの現場では、障害の「制限事項」を列挙する「欠損ベース評価（Deficit-Based Assessment）」が優先され、CCIのような「資産ベース」の介入を行う時間的・制度的余裕が与えられていない²³。

4. 自信喪失の要因（The Cause）：構造的メカニズムの解説

なぜ職業リハビリテーションのクライアントは「自信（Confidence）」を喪失し、受動的になるのか。本調査は、それを個人の心理的特性ではなく、リハビリテーションシステム自体が引き起こす「医原性（Iatrogenic）」の副作用として特定した。

4.1 欠損ベース評価（Deficit-Based Assessment: DBA）のパラドックス

現行の福祉制度において、サービスや給付を受給するためには、クライアントは自らの「無能力」を証明しなければならない。

- **メカニズム:** 申請書、診断書、FCEのすべてが「何ができないか」を詳細に記述することを求める。クライアントは、「私は働けない」「私は重度の障害がある」というナラティブを繰り返しリハーサルすることを強いられる²⁴。
- **ダブルバインド:** 支援を得るためには「無力」でなければならず、就職するためには「有能」でなければならない。この構造的なダブルバインドが、クライアントの自己効力感（Self-Efficacy）を体系的に破壊している。研究データは、欠損ベースの評価を受けたグループが、強みベースの評価を受けたグループに比べて、自己効力感や学習意欲が有意に低下することを示している²⁷。

4.2 学習性無力感（Learned Helplessness）の制度的強化

セリグマンの「学習性無力感」は、回避不可能な嫌悪刺激にさらされ続けることで、反応と結果の随伴性を学習できなくなる状態を指す。VRの文脈では、以下の要因が無力感を強化している²⁴。

1. **医療モデルのパートナリズム:** 専門家が「治療者」、クライアントが「受動的な患者」という役割固定が、主体性（Agency）の発揮を阻害する³¹。
2. **管理された依存:** 「スーザン」の事例に見られるように、システムに従順であることが奨励され、自律的な問いかけや提案が「抵抗」や「否認」とみなされる場合がある。

4.3 「道徳的会計（Moral Accounting）」と内在化されたエイブリズム

認知言語学者ジョージ・レイコフ（George Lakoff）らの「道徳的会計」メタファーは、この心理的メカニズムを解明する鍵となる¹。

- **ウェルビーイング=富、義務=負債:** 社会は無意識のうちに、道徳的な正しさを貸借対照表として理解している。他者に貢献することは「クレジット（貸方）」を積み上げることであり、他者に依存することは「デビット（借方）」を背負うことである。
- **赤字のアイデンティティ:** 障害を持つ個人は、生産労働による貢献が困難であるとみなされ、福祉や配慮を受けるだけの「純粋な負債者（Net Debtor）」として社会的に位置づけられる。
- **内在化されたエイブリズム:** クライアントはこの外部的な「赤字の元帳」を内在化し、「自分は社会のお荷物である」「配慮を求めるることは、他者の負担になる（借金を増やす）ことだ」と感じるようになる³³。

この「道徳的負債感」こそが、自信喪失の深層にある根本原因（Root Cause）である。

5. 未開拓性（The Vacancy）：複式簿記メタファーの可能性

本調査の最も革新的な発見は、上記の構造的問題を解決するための理論的枠組みとして、「複式簿記（Double-Entry Bookkeeping: DEB）」メタファーが未開拓の鉱脈（Vacancy）として存在していることである。

5.1 単式簿記（Single-Entry）の限界

現在の「医学モデル」や「欠損ベース評価」は、構造的に「単式簿記」である。

- **記録内容:** 障害（Disability）、欠損（Deficit）、コスト（Cost）、制限（Limitation）。これらはすべて「損失」や「出費」のリストである。
- **結果:** 単式簿記では、損失は単なる「マイナス」でしかない。したがって、障害受容とは「マイナスを受け入れること（諦め）」と同義になる。

5.2 複式簿記（Double-Entry）によるパラダイム転換

1494年にルカ・パチョーリが体系化した複式簿記の核心は、「取引の二重性（Duality）」にある³⁵。

$\text{Assets} = \text{Liabilities} + \text{Equity}$
この論理をアイデンティティの再構築に応用することで、全く新しい「自己の会計学」が可能となる。

- 負債 (Liabilities) としての障害:
障害による機能喪失や社会的バリアは、否定しようのない「負債」として計上する。これは医学的アリズム (Denialの回避) を担保する。
- 資産 (Assets) としてのナラティブ:
しかし、複式簿記では、負債の発生は必ず「資産」の増加と対になる（例：借金をして現金を調達する）。同様に、障害という負債を負う経験を通じて、個人は独自の「資産」を獲得しているはずである。
 - 獲得される資産: レジリエンス、複雑なシステムを交渉する能力、他者への共感性、当事者ならではの視点・知恵（当事者知）。
- 純資産 (Equity) の均衡:
自己の価値 (Equity) は、障害（負債）を差し引いた残りカスではなく、負債と資産のバランスの上に成り立つ動的な均衡状態として再定義される。

5.3 日本の「当事者研究」：複式簿記的実践の先駆例

この「複式簿記的アプローチ」は、単なる机上の空論ではない。日本の**当事者研究 (Tojisha-kenkyu) **の実践において、既にその萌芽が見られる¹。

- 弱さの開示=資産化: 当事者研究では、幻聴や妄想、身体的な苦労といった「症状（負債）」を隠すのではなく、それを「研究テーマ」として公開し、仲間と共有する。
- 自分助けの技法: 自らの苦労のパターンや対処法をまとめた「自分説明書 (Jibun Jiten / Self-Manual)」を作成することは、まさに自己の「資産台帳」を作ることである。ここでは、障害という負債が、他者を助け、自己を理解するための「情報資産 (Information Capital)」へと変換されている。

結論: 「複式簿記メタファー」は、従来の「医学モデル（単式簿記・マイナス評価）」とも「社会モデル（環境のせいにする）」とも異なる、第3の道（資産運用モデル）を提供する未開拓の理論的沃野である。

6. 比較制度論とデータによる補強

6.1 日米英の制度比較とナラティブの位置づけ

本調査では、ナラティブ・アプローチの受容状況について、以下の比較表の通り分析を行った¹。

特徴	日本 (Japan)	英国 (UK)	米国 (USA)
----	------------	---------	----------

支配的モデル	資源活用・ケア管理モデル (MHLW / 厚労省)	社会モデル・バリア除去 (Equality Act 2010)	権利擁護・エンパワメント (ADA 1990)
「受容」の定義	伝統的：「障害受容」（諦念） 革新的：「当事者研究」（研究）	政治的：「障害アイデンティティ」 (誇り・連帯)	心理的：「障害適応」 (機能的自立・雇用)
ナラティブの位置	制度外で進化（当事者研究）。 行政的なVRには未実装。	OT（作業療法）の一部として存在。 政治的ナラティブが強い。	キャリアカウンセリングで発達。 Savickasの理論が強いが、 州のVRシステムでは限定的。
自信喪失の主因	「働く者」のステigma。 集団主義的压力。	「給付金受給者」へのバッシング。 緊縮財政下の道徳的非難。	「独立・自立」の圧力。 医療費・コストの個人負担感。

分析: いずれの国においても、ナラティブ再構築を制度的な「評価（Assessment）」の核に据えている例は皆無である。これは「Gap」がグローバルな課題であることを示している。

6.2 構造化データによる裏付け

- **FCEと心理社会的要因の乖離:**
 - FCE（機能的容量評価）の結果と、実際の就労復帰率との相関は必ずしも高くない。むしろ「自己効力感（Self-Efficacy）」や「恐怖回避思考（Fear-Avoidance）」の方が、復職の予測因子として強力であるという研究結果が多数存在する³⁶。
 - これは、現行の「ハードな評価（FCE）」が、就労の成否を決定する「ソフトな要因（ナラティブ・心理）」を見逃しているという「Gap」の定量的証拠である。
- **ナラティブ介入の効果:**
 - PTSDや複雑性悲嘆（Prolonged Grief Disorder）に対する「ナラティブ再構築療法（Narrative Reconstruction Therapy: NRT）」のRCT（ランダム化比較試験）では、侵入思考の減少や記憶の統合に有意な効果が確認されている³⁹。
 - このエビデンスは、VR領域におけるナラティブ介入の導入が、単なる「おしゃべり」

ではなく、臨床的に有効な「技術」たり得ることを示唆している。

7. 結論と提言

本調査は、職業リハビリテーションにおける「自信喪失」の問題が、個人の心理的問題ではなく、「ナラティブ技術の欠落」と「単式簿記的な評価システム」によって構造的に生産されていることを明らかにした。

7.1 結論の要約

- 理論は存在する:** ベリー、ウィリアムズ、ヨシダ、サビカスらによって、ナラティブ再構築の理論的土台は完成している。しかし、それは現場のプロトコルに翻訳されていない。
- 道具がない:** 現場には、クライアントが自らの物語を再編集するための「編集ツール」がなく、あるいは「欠損」を測定する「計測ツール」ばかりである。「スーザンの問い」は放置されている。
- 会計が歪んでいる:** 「道徳的会計」と「欠損ベース評価」が、障害を「純粹な負債」として定義し、クライアントの自己資本（自尊心）を毀損している。
- 複式簿記が必要である:** この状況を打破するためには、障害を負債として認めつつ、そこから生まれるナラティブを資産として計上し、アイデンティティのバランスシートを均衡させる「複式簿記的アプローチ」が不可欠である。

7.2 提言：ナラティブ資産対照表（Narrative Asset Balance Sheet）の実装

本報告書は、今後のアクションプランとして、以下のツールの開発と実装を提言する。

ツール名：ナラティブ資産対照表（NABS: Narrative Asset Balance Sheet）

- 目的:** 欠損ベース評価（DBA）に対抗し、クライアントの「ナラティブ資産」を可視化・構造化する。
- 構成要素:**
 - 借方（Debits / Liabilities）：**「生活上の困難」「機能的制限」「必要な配慮」。これらを詳細に記述し、直視する（Tojisha-kenkyuのリアリズム）。
 - 貸方（Credits / Assets）：**上記の困難に対処するために開発した「工夫」「視点」「経験知」「レジリエンス」。サビカスのCCIを用いて抽出した「ライフ・テーマ」。
 - 資本（Equity / Identity）：**借方と貸方を統合した、「再構築された自己像」。
- 運用:** 職業リハビリテーションの初期評価（インテーク）において、FCEと並行してNABSを実施する。これにより、クライアントは「支援される客体」から「自らの資産を運用する主体」へとリフレーミングされる。

この「複式簿記メタファー」の導入こそが、理論的空白（Vacancy）を埋め、自信喪失（

Cause) を根治し、実践の欠落 (Gap) を架橋する唯一の構造的解法である。

引用文献

1. 2025_12_23_Narrative Disability Acceptance Research – Verification Report.pdf
2. Biographical disruption and factors facilitating overcoming it - SHS Web of Conferences, 12月 24, 2025にアクセス、
https://www.shs-conferences.org/articles/shsconf/pdf/2018/12/shsconf_shw2016_03007.pdf
3. (PDF) Chronic Illness as Biographical Disruption - ResearchGate, 12月 24, 2025にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/13039112_Chronic_Illness_as_Biographical_Disruption
4. 'A Completely Different Person': Embodied Dialectics and Biographical Disruption After Stroke - PMC - PubMed Central, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC1259258/>
5. Biographical Disruption and Chronic Illness: A Critical Reflection - The Health Topics, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://healthtopic.org/topics/biographical-disruption-and-chronic-illness-a-critical-reflection/>
6. The genesis of chronic illness: narrative re-construction - PubMed, 12月 24, 2025にアクセス、<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/10268832/>
7. The genesis of chronic illness: narrative re-construction. | Semantic Scholar, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://www.semanticscholar.org/paper/The-genesis-of-chronic-illness%3A-narrative-Williams/0eb513bfc4f47cb0ffa4d1942e5d22330a9d81ce>
8. Reshaping of Self: A Pendular Reconstruction of Self and Identity among Adults with Traumatic Spinal Cord Injury | Request PDF - ResearchGate, 12月 24, 2025にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/229727272_Reshaping_of_Self_A_Pendular_Reconstruction_of_Self_and_Identity_among_Adults_with_Traumatic_Spinal_Cord_Injury
9. Enhancing the sense of self of a mid-career woman through career construction counselling - PMC - PubMed Central, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC8761374/>
10. An exploration of the processes of self-identity reconstruction by people who acquire a brain injury Susan L., 12月 24, 2025にアクセス、
https://central.bac-lac.gc.ca/item?id=mq24973&op=pdf&app=Library&oclc_number=1203069900
11. TEN IDEAS THAT CHANGED CAREER DEVELOPMENT, 12月 24, 2025にアクセス、
https://www.ncda.org/aws/NCDA/asset_manager/get_file/71112?ver=29242
12. Life Design: A Paradigm for Career Intervention in the 21st Century - ResearchGate, 12月 24, 2025にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/264756551_Life_Design_A_Paradigm_for_Career_Intervention_in_the_21st_Century

13. Construct Validity of Functional Capacity Evaluation in Patients with Whiplash-Associated Disorders - PMC - NIH, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://PMC.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC4540755/>
14. Functional Capacity Evaluations (FCEs) and Physical Therapy - MEASURAbilities, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://measurabilities.com/functional-capacity-evaluations-fces-and-physical-therapy/>
15. Functional Capacity Evaluation & Disability - PMC - NIH, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://PMC.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC2150654/>
16. VOCATIONAL REHABILITATION WHAT WORKS, FOR WHOM, AND WHEN? - GOV.UK, 12月 24, 2025にアクセス、
https://assets.publishing.service.gov.uk/media/5a7ccd8bed915d6b29fa8c2b/hww_b-vocational-rehabilitation.pdf
17. Different Learners | Book by Jane M. Healy | Official Publisher Page | Simon & Schuster, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://www.simonandschuster.com/books/Different-Learners/Jane-M-Healy/9781416556428>
18. Copyright Undertaking - PolyU Electronic Theses, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://theses.lib.polyu.edu.hk/bitstream/200/12028/3/6402.pdf>
19. A Case Study: Vocational Rehabilitation Helps Chicagoan Regain Confidence and Get Back to Full Employment - Shirley Ryan AbilityLab, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://www.sralab.org/research/labs/cror/news/case-study-vocational-rehabilitation-helps-chicagoan-regain-confidence-and-get-back-full-employment>
20. Career construction theory: tools, interventions, and future trends - PMC - NIH, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://PMC.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC11026660/>
21. Career construction theory: tools, interventions, and future trends - Frontiers, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://www.frontiersin.org/journals/psychology/articles/10.3389/fpsyg.2024.138123/full>
22. Career Construction Interview Process & Instructions, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://b2awellness.com/wp-content/uploads/2024/07/Career-Construction-Interview-Process-Instructions.pdf>
23. Factors associated with consumer engagement and satisfaction with the Vocational Rehabilitation program, 12月 24, 2025にアクセス、
https://worksupport.com/research/documents/pdf/factors_associated_with_consumer_engagement_and_satisfaction_VR.pdf
24. Consequences of Learned Helplessness and Recognition of the State of Cognitive Exhaustion in Persons with Mild Intellectual Disability - PMC - NIH, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://PMC.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC5413468/>
25. Personal Recovery and Mental Illness | PDF - Scribd, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://www.scribd.com/document/703013345/Personal-Recovery-and-Mental-Illness>
26. The Strengths Perspective in Social Work Practice PDF - Scribd, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://www.scribd.com/document/424876993/The-strengths-perspective-in-soc>

ial-work-practice-pdf

27. The effects of strength-based versus deficit-based self-regulated learning strategies on students' effort intentions - PMC - NIH, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://PMC.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC4565885/>
28. The relationships between strengths-based teaching practices and students' general, strengths, and academic self-efficacy, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://d-nb.info/133841089X/34>
29. Learned Helplessness among Persons with Disabilities: Concept, Causes and Developing Self-defense Skills (Comprehensive Textbook of disability) - ResearchGate, 12月 24, 2025にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/356878590_Learned_Helplessness_among_Persons_with_Disabilities_Concept_Causes_and_Developing_Self-defense_Skills_Comprehensive_Textbook_of_disability
30. Learned helplessness among vocational nursing students: current status and influencing factors - PMC - NIH, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://PMC.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC12211960/>
31. Medical vs. Social Models of Disability: A Comparative Analysis - Psychology Town, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://psychology.town/disability-rehabilitation/medical-social-models-disability/>
32. Moral Accounting Metaphors in American Political Discourse - KANSAI GAIDAI UNIVERSITY, 12月 24, 2025にアクセス、
https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/record/6091/files/r097_02.pdf
33. TXT - Review of Disability Studies, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://rdsjournal.org/index.php/journal/article/view/871/2200>
34. Ableism as a regulator of social practice and disabled people's self-determination to participate in sport and physical activity - Coventry University, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://pureportal.coventry.ac.uk/files/42114179/Binder1.pdf>
35. Double-entry bookkeeping - Wikipedia, 12月 24, 2025にアクセス、
https://en.wikipedia.org/wiki/Double-entry_bookkeeping
36. Functional self-efficacy beliefs influence functional capacity evaluation - PubMed, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/17235677/>
37. Psychosocial Factors and Functional Capacity Evaluation Among Persons with Chronic Pain, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://deepblue.lib.umich.edu/items/d034ee0b-5398-4ad2-9b78-3b650fee1663>
38. Functional Self-Efficacy Beliefs Influence Functional Capacity, 12月 24, 2025にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/6566722_Functional_Self-Efficacy_Beliefs_Influence_Functional_Capacity_Evaluation
39. A quasi-experimental trial of narrative reconstruction for prolonged grief disorder: Symptomatic improvement and enhanced memory integration - PubMed, 12月 24, 2025にアクセス、
<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37590286/>